

## 幽鳥感覺

富永隆一

何時からこうして当てもなくさまよい歩いているのだろうか。白濁した意識は定かな記憶を魅らせてはくれない。醜くふやけた手に握っている金属製の鳥が、けたたましい音をたてて、その鋭い嘴を閉閉させた。

この鳥はいったい何処で掴まえてきたのだろうか。鳥は何も語ろうとはしない。その慄然とした姿が、喪失した記憶を物語っているように見える。

歩き疲れて石の上に腰をおろすと、それまで明るかった空が急に黒ずみ始めた。そして、あたり一面が暗くなり、そこに大きな影をつくった。

周囲の家々からは物音ひとつ聴こえてこない。ひっそりとして、奇妙な静寂さばかりが耳にいたく響く。鳥はもう逃避する事を諦めたようだ。それまで強く握っていた指を一本ずつゆるめていくと、鳥は不安そうに身を縮めた。いささかも逃げる気配を示さない。掌の上で淋しそうに眼を閉じて、青い涙を一滴、尾を引きながら落した。

悲哀の鳥を打ちのめしてはならない。この日暮れ、心もとない幽明のさなかにあつて、冷徹な金属製の鳥は救いであるべきなのだ。

掌に染みた鳥の泪が、たつたひとしずくの泪が、みるみるうちに肉体を腐蝕していった。それは懐古と愉悅の混じった、不思議な感覚を肉体に刻んだ。

やがて甘美な麻痺感が襲ってきた。慄えながら、愛しい物の怪に取りつかれると、勢いよく肉体を反転させて軋んだ。

鳥は頭上で鈍い金属音をたてながら舞い、冷静な表情で、痛苦に甘んじている肢体のまぶしい痙攣を観察している。その冷やかかな、光沢の乏しい眼球を、機を狙って捉えると、指先で鋭く抉った。

二つの強靱な球は掌の中で膨脹し、激しく回転すると、滑らかな肌を摩擦した。そしてまず手首ま

で呑みこむと、徐々に食欲を増して、からだ全体を球の中に納めてしまった。貪婪な眼球の、逞しいまでの意欲に打ちひしがれて、脆い肉体は細部にわたるまで浸蝕された。

眼球を失った鳥は、それでも己の羽を駆使して中空の一点に思い留まっている。その見事な空中停止は、どんな秘術さえも覆すほどの、時計台から踊り出た麗人の微笑である。この優雅な背景を、より爽やかな透明に、さらに高貴な漆黒に、いさぎよく変えてみよう。

朽ち果てた驟雨の生々しい泣き声が耳殻を激しく揺さぶる。まだ月はいくらかでも欠けているのだろうか。遠く浮かび上がった地平線を、白衣をまとった数知れない少年の長い列が横切る。その影が大きく眼球を包みこむと、わなわなと陽炎が立ちのぼり、球体の表面がおびただしくひび割れ、たちまち形が崩れて輪郭を失った。

盲目の鳥は、その衰弱した羽をぎこちなく探わせると、何度か地上に落下しながらも、形を失くした球体の残滓をむさぼり啄んだ。羽の裏側はずでに赤黒く腐蝕している。力つきて鳥は分解し、無惨な骨組みをさらけ出した。

こうして錯ついた骨を拾い集めながら、どのくらいの時が過ぎただろうか。石の上に鈍く重い腰をおろしながら、あまりにも暗い空に向かって、腐蝕しかけた羽を小刻みに探させた。

朦朧とした意識をふりすてようと顔をさぐってみると、抉られた眼窩の奥で、青白く光る眼球が、うっとりした目つきで執拗に指先の動きを凝視していた。